

## 「結核」—古くて新しい現代の病気—

県北に住む会社員 A 子さん（46 歳）は、3 ヶ月前から咳（せき）が続いていました。風邪の症状はなくなったのにゴホゴホとした咳が止まらないのです。小児ぜんそくの既往のある A さんは以前に治療を受けたことのある「咳ぜんそく」と自己判断して、自宅にあった吸入ステロイド薬を使用しましたが良くなりません。このため、近所のかかりつけ医から専門の医療機関を紹介してもらい胸のエックス線や病原菌の検査を受けたところ、「肺結核」と診断されました。

明治時代から昭和 20 年代まで結核はわが国の死亡原因のトップであり、「国民病」や「死の病（やまい）」と恐れられて来ました。有効な薬剤の登場や栄養状態の改善により、今では患者数も大幅に減って入院期間も短くなりましたが、結核は現在でも毎年 2 万人以上が発生している重大な感染症であり、決して「過去の病気」ではありません。

結核が単なる風邪やインフルエンザと異なるのは、飛沫核感染（空気感染）により学校・病院・事業所などで集団感染がしばしば起こることです。重症患者が咳やくしゃみをした時のしぶき（飛沫）には結核菌が含まれており、このしぶきの水分が蒸発して核の部分の結核菌だけが空気中にたどよい（飛沫核）これを周囲の人が吸い込む事で感染の機会が生じます。しかし、結核菌に感染しても必ず発病するわけではなく、通常の免疫力があればほとんどの人は発病しないのです。

『呼吸（いき）すれば胸の中にて鳴る音あり  
 凧（こがらし）よりもさびしきその音』 （石川啄木）

26 歳という若さで世を去った啄木は、その短い生涯を貧困と結核という 2 つの苦しみにによって悩まされ続けました。このため彼の歌には常に死の影が感じられ、その作品は深い諦観（ていかん）のなかにあります。昔の結核は啄木のような若者がバタバタ死んでしまう若者の病気でしたが、今の結核は約半数が 70 歳以上の高齢者であり、外国人やホームレスなど社会的弱者の患者も増えています。自覚症状のほとんどない結核もあるため、定期的な健康診断とともに咳や痰（たん）が 2 週間以上続く場合には早めに医療機関を受診してください。

（塩谷郡市医師会リレーコラム 養生のススメ）